



77



KEMONOTE



ケモノート®

76



スローな暮らしはいかが？

スローに動くナマケモノ。

その暮らしぶりには理由があって…

この日の大牟田の気温は21度。心地よい日差しに誘われ、ナマケモノの二頭がゆっくりと部屋の外へ出てくる様子が見られた。

観察していると、あれ、思ったより動きがはやい…わたしたちが「ほとんど動かない」というイメージを抱いているのは「ミツユビナマケモノ」で、大牟田市動物園のクリちゃん和ダイクは「フタユビナマケモノ」。おなじナマケモノでも、種類によって性質が異なるのだ。

広々としたリスザル王国の中、二頭は四本の足を器用に動かし、枝やロープをつたってずんずん動いてゆく。消防士のロープ渡り訓練を連想してしまうが、ナマケモノにはほとんど筋肉がないという。（本当に…？）

葉っぱがたくさんあるエリアでは、カギ爪で葉っぱを引っかけてちょっと一服。居心地の良い場所を見つけたら、しばらく居眠り。日当たりなどに変化があると、また心地よい場所をもとめて動く。そしてまた、居眠り。

ナマケモノは哺乳類には珍しく変温動物。体温調節ができないので、「ゲリラ豪雨などの時は、急いで二頭を屋内に誘導します」と飼育担当の本廣さん。好物のサツマイモを使って「こっちだよ」と誘う…けれど、ことにクリちゃんは気ままな性格で「全然動いてくれない」と、本廣さんは困り顔だ。

ナマケモノのゆっくりとした動きは、天敵に見つからないため、それから、エネルギーを消耗しないため。ナマケモノは一生のほとんどを樹の上で過ごし、葉っぱなどカロリーの少ないものを食べて暮らしている。だから、エネルギーを節約しなければ生きていけない。スローな生活にはれっきとした理由があるのだ。

二頭が部屋から出る時と戻る時は、特に間近で観察できるチャンス。二頭のクリツとした



81



クリ(♀)

2015年10月15日高知県生まれ。2017年に大牟田市動物園に来園。自由きままな性格。好きな食べ物は、サツマイモ、ブロッコリーなど。



ダイク(♂)

1997年生まれ。2020年に神戸市王子動物園より来園。好奇心旺盛で食にどん欲。好きな食べ物は、サツマイモ、キュウリなど。クリーム色の毛色の特徴。

80

目、全身から発せられるほんわかムードがかわいい。本廣さんのおすすめは、耳。滅多に見えないけれど、顔の横にある毛の分け目あたりに注目。

それにしても。人間は、自分たちより動きの遅いこの動物を「ナマケモノ(sloth)」と名づけた。しかし彼らは生きるためにのんびりしているわけで、けっして怠けているわけではない。それに、早く動けるのってそんなに偉いだろうか。

早いことが良しとされる社会で、日々の忙しさに追われ、何かを見失いそうになることがある。そんな時はここへ、クリちゃんとダイクに会いにきてほしい。スローに生きる二頭を見ていたら、忘れていた自分のペースを、思い出すことができるかもしれない。





どうぶつえんの「人」

動物の健康管理のために行うハズバンドリートレーニング、飼育環境を整える環境エンジニアリング、ライオンやトラなどの無麻酔採血、モルモットの「自由参加」システム……これらすべて、大牟田市動物園が日本で先駆けて行ってきたということをご存知だろうか。福岡県のすみっこにある、古くて小さな動物園が、動物福祉において、国内最先端の取り組みを実践していることなど、誰が想像できるだろう。

2007年に大牟田市動物園の園長に就任

した椎原春一さんは、動物園の新しいあり方を模索し、切り拓いてきた。椎原さんはどのような思いでここまでやってきたのか。その人生を辿ってみたい。

「ひねたガキ」だった少年時代

椎原さんは1959年、鹿児島県の川辺町（現在の南九州市）生まれ。田畑と、山や川が身近にある自然豊かな環境で育った。

椎原少年の目に映っていたのは、季節の移



82



83

り変わりをを感じる実家のみかん畑、クラスのみんなで教室を抜け出して遊んだ裏山、「修行」と称して励んだ薪割り。実家が営む養鶏場で目撃した衝撃的な光景でさえも、少年の感性を育む要素となったにちがいない。

勉強はそれほど好きではなかったというが、読書が大好きで、さまざまなジャンルの本を読んだ。特に好きだったのはSF小説。『宇宙船ビーグル号の冒険』や『DUNE 砂の惑星』などを読み、科学者や異星生物が登場する話に心惹かれ、「生物学っておもしろいな」と考えるようになった。

「ひねたガキだったんで、動物園に行ったら『かわいそうに、こんな狭いところにとじこめられて』とか思ってたし、SF小説を読んでも、異星生物は悪者として登場するんだけど、『この子たち、なんで侵略してきたのかな』とかそういうことを考えてました」

鹿児島大学の大学で生物学を学び、卒業後、最初の就職先は、地元鹿児島の実験用試薬や道具などを卸す会社の営業職。3年後に退職し、次に入社したのは動物実験を行う会社だった。

「ウサギの皮膚にクリームを塗ったり、イヌに避妊薬を与えたり」

椎原さんは、人間のために動物を利用することへの葛藤と、（情報漏洩してはならないという規則のため）誰にも愚痴をこぼせない状況に、苦しんでいたという。そんな時、転機が訪れる。

営業職時代に出会った友人の結婚式に参列したところ、同席の知人から「福岡市内の動物園で飼育員を探してる。椎原くんは動物のことも勉強してるし、どう？」と声をかけられた。

「あそこで彼に出会わなければ、わたしは今、動物園の業界にいなかったかもしれません」

こうして1987年、椎原さんの動物園業界でのキャリアがスタートした。椎原さんが27歳になる年のことだった。

父の事故。そして地元鹿児島へ

しかし、「しばらくはこの仕事でがんばるか



ら」と両親に伝えた数か月後、父が事故で他界。あまりに突然の出来事に、椎原さん以上に困惑したのは母だった。

「ちゃんとお別れも言えなかったと、精神的にまいってしまってた。その頃は毎日毎日、母親と電話してました」

間もなく椎原さんは、系列の鹿児島県の民間動物園に異動願を出した。希望が叶ったのは、それから5年経った1993年。その民間動物園で、椎原さんは動物のトレーニングを始めることになる。

「その動物園ではチンパンジーやオランウータンのショーをやってたんですけど、41歳で園長になった時に、世界的な動物福祉の流れを汲んで大型類人猿のショーをやめることにしました。でも、当時は経営的にショー自体は必要と考えて、フラインゴやコンゴウインコ、ネズミ、ミニブタ、いろんな動物のショーをやりました。今もやってる『正の強化』を使ったトレーニング法を始めたのがこの頃です。海外ではすでに、そういうトレーニングが動物福祉とも繋がっているという認識だったので、うちも動物福祉を全面に出していこうと」

『正の強化』を用いたトレーニングとは、「行動の後に良いことがある」と動物に学習してもらうことで進めていくトレーニング方法だ。

年以上勤めた鹿児島県の動物園を退職した。

「運命の転職先」のはずが…

けれどこの直後、想定外のこと起きる。「指定管理者制度を導入する」と提言した市長が、年末に行われた市長選で敗北。しかも、新しい市長が打ち出した方針は「2年間、動物園の閉園を検討する」というものだったのだ。この時、椎原さんはこう思ったという。

「前の動物園に『もうちょっと考えさせてください』って言うっておけばよかった…」

とはいえ、時は戻せない。椎原さんには、妻と小学生の子どもが二人いた。家族を養うため、椎原さんは複数のアルバイトを始める。中にはコンビニでの深夜バイトもあった。

「深夜の方がお給料がいいっていうのと、昼間は専門学校の講師もしてましたからね。毎週1泊2日で福岡に来て、専門学校で最後のコマまで授業をやって、終わったら新幹線で鹿児島に帰って。帰宅したら、すぐ着替えてコンビニに駆け込んで、翌朝まで。あの2年でわたし、だいぶ寿命を縮めてると思います」

そうして2年後。市民たちの動物園存続を願う声が高まり、12月の大牟田市議会で、ようやく指定管理者制度の導入が決定した。しかし椎原さんにホッとしている時間はなかった。なにしろ、これまで動物園に勤めていた市

当時、日本ではまだ「動物福祉」という言葉すらあまり知られていなかったが、しばらく経つと、国内でもそれに注目する動きが出てきた。2002年には市民ZOOネットワークというNPOが、動物たちの環境をよりよくする取り組みを表彰する「エンリッチメント大賞」を設立。

その第一回目の飼育担当部門大賞を受賞したのが、椎原さんの当時の部下である野上悦子さんだった。野上さんは、動物たちの飼育環境にある植栽の整備と給餌方法の工夫を高く評価された。20年以上前に鹿児島で行われていたこの取り組みは、現在では多くの園で実施されている。しかし当時はどれほど新鮮に映ったことだろう。野上さんに刺激を受けた動物園関係者は少なかつたはずだ。

着実に実績を積み重ねていた椎原さんだったが、それと裏腹に母体会社の経営は悪化。動物園を運営しながら動物を繁殖させて売却する、いわゆるペットファームのような業態にしたい、やってほしいと経営陣に頼まれた椎原さん。しかし「やりません」と即座に拒否したそう。

ちょうどその頃、大牟田市動物園が、民間業者に管理を委託する「指定管理者制度」を導入するにあたり、動物園の運営経験が豊富な人材を探しているという話を耳にした。これこそ運命の転職先だと考えた椎原さんは、大牟田へ行くことを決意。こうして、椎原さんは10

職員の勤務は3月末まで。4月1日からは完全に新しいメンバーのみでスタートしなければならぬのだ。椎原さんは、専門学校の教え子たちや知り合いにかたっぱしから声をかけ、人集めに奔走した。

そんなドタバタ劇をなんとか乗り越え、2006年、椎原さんは大牟田市動物園の副園長となり、翌年、園長に就任する。このまま来園者数が増えず赤字が続けば、大牟田市動物園は、また閉園の危機に晒されるという状況だった。

椎原さんの大牟田市動物園改革

ここでちょっと想像してみてほしい。あなたがもし、動物園の来園者数を増やそうと思ったら、まず何をしようと考えてるだろう。

古くなった施設を真新しくおしゃれな建物に変えてみようか？
はたまた、珍しい動物を迎えるというのはどうだろう？

椎原さんがやったことは、そのどちらでもなかった。椎原さんは、これまでやってきた動物福祉…：環境エンリッチメントとハズバンダリートレーニングに、大牟田市動物園でさらにしっかりと取り組むことにしたのだ。

新しいスタッフたちは、椎原さんの教え子



「小さくても惹きつけられる絵」を目指して

が多かったため、動物福祉の取り組みへの理解があった。皆経験が無いながらも「実践してみたい!」というやる気に満ちていたという。椎原さんは、スタッフのやりたいことをどんどん後押しした。

取り組みが活発化するにつれ、来園者は増加していく。2004年に年間13万5000人まで落ち込んだ来園者数は、順調に伸び続けて2016年、ついに1941年の開園以降歴代3位となる25万1600人を達成。その後、2019年まで連続して20万人超えを記録した。

来園者が増えた理由

椎原さんが大切にしたのは、動物福祉に取り組むだけでなく、動物福祉について来園者に「伝える」ということ。ハズバンドリートレーニング自体をイベントにして、何のためにこのトレーニングが必要なのか、どういった工夫を行っているかなどを伝えるようにした。また、環境エンリッチメントについても、どのような意図でそれを行なっているかが伝



「そうはいません」看板。(2015年撮影)この数年後、SNSで話題に。

わるよう、飼育員たちがそれぞれ工夫をこらして看板などを自ら作成した。

大牟田市動物園の施設自体は古いものだが、手づくり感あふれる看板があちこちに立つ園内は和やかなムード。また、飼育員たちが動物福祉に積極的に取り組むことで、動物たちもどこかのほんとした空気を醸し出している。

今はもう昔のこと(だと思っ)だが、動物園に行って、もの悲しい気持ちになった経験はないだろうか。子どものころに椎原さんが感じていた、とじこめられた動物をかわいそうだと思う感覚、それがその気持ちの正体だったのではないか。

「大牟田市動物園に行くと、動物が幸せそうに暮らしていて心が和む」という来園者の声がある。それはおそらく、飼育員たちの取り組みが動物たちの快適さと噛み合い、うまく回っている証だ。

取材をしていると、飼育員さんたちは皆、「動物たちに幸せになってほしくてあれこれやっている、けれども『本当に』その動物が幸せかどうかはわからない」と言う。わたしは、誰かにそれほど幸せを願ってもらえる動物たちが、幸せでないわけではないんじゃないかと思った。しかし、椎原さんは言う。

「動物愛護と動物福祉の違いは、結果を見て改善していくというサイクルがあるかないかなんですよ。動物愛護だったら『この動物のためと思ってやりました』で終わってもいい。だけど動物福祉は、それが終わった後、結果を検証して、次に繋げるんです」

2016年、大牟田市動物園は『動物福祉をつたえる動物園』をコンセプトに掲げた。それとほぼ同時に、モルモットの「ふれあい」をやめ、『モルモットと私の時間』というイベントを立ち上げた。開始時刻になると、モルモットたちが生活する「おうち」からイベント会場まで、「モルロード」と呼ばれる橋がかけられる。イベントに参加したいモルモットはモルロードを渡って会場にやってくるので、来園客はその様子を間近で観察したり、おそろおそろキャベツの切れ端を差し出したりして楽しむ。しかし、気分が乗らないモルモットを無理にイベントに出させることはしない。この「自由参加」システムが、「新しい!」、モルロードをどどっと駆けていくモルモットたちの様子が「かわいい!」と、SNSなどで話題になり、現在も人気イベントとなっている。

その年、大牟田市動物園は、園全体で動物福祉に取り組んだことが評価され、エンリッチメント大賞を受賞した。

「小さくても惹きつけられる絵を」

椎原さんは、小学生の頃に先生に言われた言葉が忘れられないという。

「田舎の小さな小学校だったんですけど、音楽の先生が熱心な人で、県の音楽コンクールに出たんですよ。うちよりずっと大きい小学校とか、都会の小学校も参加してて、管楽器も使ってたりして。でもうちは、メインはハーモニカで、あとはアコーディオンとか、鉄琴とか木琴とかだけ。その時に先生が言ったのが、『美術館でも、大きい絵にはたしかに圧倒されるけど、たくさん並んでる中に、小さくても惹きつけられる絵はあるから。私たちはそれを目指しましょう』って。それは、今も自分の指針になってます」

大牟田市動物園は、小さくて古い地方の動物園。けれどこの動物園に行くと、なぜだか心が和む。その理由は、動物たちが幸せそうに見えるから。そして、そのための努力を惜しまない人たちがここにいるから。

「小さくても惹きつけられる絵を目指しましょう」

椎原さんはずっと、この恩師の言葉を実践しつつづけているのだ。

椎原春一

(しいはらしゅんいち♂)
1959年鹿児島県生まれ。2007年より大牟田市動物園の園長をつとめる。好きな食べ物はミカン、イチゴ、ブドウ、アイスクリーム、ショートケーキ。寝ているときに見る夢の物語を楽しんでいる。